

福島敏夫隨筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」 から

主宰論説19

パリ市内探記

1) ルーブル美術館

パリ市内の観光の一環として、先ず、ルーブル博物館を訪れた。約30年前に訪れたときは、補修と改築の最中で、「モナ・リザ」の絵と、「サモトラケ島のニケ像」という彫刻を主に見たのを覚えている。今回は、フランス政府の肝いりで全面的な改築がなされ、ガラスのピラミッドなどもあって、様相を一新した新ルーブル美術館への訪れであった。あまりにも広い館内にあるすべての芸術品を鑑賞しようと思うと、一週間以上かかるのではないかと思った。ガイドの案内により、主な芸術作品を駆け足で回って鑑賞した程度であった。今回も、「モナ・リザ」の像を見たが、見物客のあまりの多さ故、ゆっくり見ている暇がないくらいであった。「ミロのヴィーナス」、「サモトラケ島のニケ像」は、今回も、その優美な姿態に、改めて、深い印象を持った。その他、ドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」、ダビッドの「ナポレオン1世の戴冠式」などの絵は、その作者の大いなる構想とすばらしさを感じ入った次第である。

平成24年6月25日

自由俳句：

ルーブルの美術の華麗さ麦の秋

令和3年2月7日脱稿

自由俳句：

モナ・リザの不思議な笑い寒椿

2) オペラ座

オペラ座は、パリの中心エリアにあり、シャルル・ガルニエの設計による劇場であり、16世紀の古典様式とバロック様式からなる。ガルニエ宮とも言う。優美で豪華なその館内と観劇場内の大空間と装飾は、熱気にあふれた観劇の様子を彷彿させる。今回、幸い上演の日ではなかったので、その雰囲気を見学することができた。天井には、シャガールの油絵でかくされているが、もともとは、ルヌブの天井画があつたらしい。このオペラ座の界隈は、大きなホテルやギャラリー・ラファイエット・デパートなどの建築群が軒を連ね、日本料理店もいくつかあり、日本人観光客には、買い物や食事にも便利なエリアらしい。ただスリが多いので、気をつける必要があるようだ。今回、一緒に行った老妻と、観劇場内ではぐれ、慌てるトラブルもあったが、その素晴らしいことに大いに感激した。

平成24年6月25日

自由俳句：

オペラ座の観劇仕切る

は怪人か令和3年2月

5日脱稿自由俳句：

オペラ座の天井飾る名画かな

3) ノートルダム寺院

セーヌ川の中州のシテ島にあるノートルダム寺院を訪れた。聖母マリアの寺院という意味である。ゴシック建築を代表するローマ・カトリック教会の大聖堂である。月曜日であったが、結構見物客で賑わっていた。入場無料というのも、手頃に訪れる事のできるフ

ランスの建築の世界遺産として人気があるようである。昔、ナポレオンの戴冠式が行われた場所であり、ヴィクトル・ユーゴーの「ノートルダム・ド・パリ」（邦題：ノートルダムのせむし男）の舞台ともなった。寺院内部は、バラ窓という美しいステンドグラスの広い空間が3つほどあり、その壮麗さは印象的であった。ステンドグラスには、キリストの一生が描かれている。また、入り口正面の「最後の審判」など見事な彫刻も印象的であった。

平成24年6月25日

自由俳句：

陽光にまばゆく映えるノートルダム

令和3年2月8日脱稿

最近、この寺院の上部の屋根部分が、火災で焼失したというニュースが、世界中を驚かせた。このフランスの建築世界遺産の復興・修復を廻り、寄付金、復興・修復のあり方が議論されている。新型コロナウイルス禍の影響による景気落ち込みの影響などもあり、寄付金も思ったほど集まらず、難航気味だと聞いている。昔の伝統材料を使った復旧ばかりでなく、先端材料・部材の活用も含めて、より良い方法で、新たに生まれ変わると期待したいものである。

自由短歌：

教会堂ドーム型屋根シェル構造想定し支える素材に思いを巡らす。

4) サン・シャペル寺院

ノートルダム寺院の近くに、サン・シャペルの教会があり、そこを訪れた。「ゴシックの宝石」といわれ、後期ゴシック建築を代表する寺院である。ルイ9世の命で、キリストの聖遺物を安置するために、1248年に完成したという古い教会である。上階の礼拝堂は、旧・新約聖書の物語を描いた1,000個以上のステンドグラスに埋め尽くされ、これまでのどの寺院のもの以上に美しかった。添乗員のすすめに応じて、訪れてつくづく良かったと思った次第である。

平成24年6月25日

自由俳句：

壁面のまばゆい光の寺院かな

令和3年2月8日

自由短歌：

あまたのステンドグラスを通り抜け青い光のきらめく礼拝堂

5) モンパルナスの高層タワー

ヴォーボワールなどの作家や芸術系有名人の墓が多いモンパルナス墓地の近くにモンパルナス高層タワーがあり、パリ市街を眺望できる。最上階は、展望台とミニ・スナックがあり、夕方そこを訪れ、サンドイッチを食した。最近できたタワーであるが、パリ全体の夜景の概況を見渡すことができた。

平成24年6月25日

自由俳句：

摩天楼眼下にきらめく夜のパリ

6) オルセー美術館

およそ30年ぶりにこのオルセー美術館を訪れた。マネ、モネ、セザンヌ、ルノワール、などのフランスの印象派や、ゴッホ、ゴーギャンなど、後期印象派の画家の多数の作品が展示されていた。この建物は、もともとは、1900年のパリの万国博覧会に合わせて、オルレアン鉄道によって建設されたオルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルであった。設計者はヴィクトール・ラルーである。取り壊しの話もあったが、19世紀美術を展示する美術館として生まれ変わったものである。美術館の中央ホールは地下ホームの吹き抜け構造をそのまま活用している。建物内部には鉄道駅であった面影が随所に残っている。オルセー美術館は、前述の印象派や後期印象派など19世紀末のパリの前衛芸術のコレクションが世界的

に有名だが、19世紀の主流派美術で後に忘却されたアカデミズム絵画（アル・ポンピエ）を多数収蔵・展覧し、その再評価につなげていることもこの美術館の重要な活動の側面であるそうだ。鑑賞した主な絵画は、アンゲルの「泉」、カバネルの「ヴィーナスの誕生」、マネの「草上の昼食」、ドガの「踊りの花形」、ルノアールの「ムーラン・ド・ギャレット」、セザンヌの「台所のテーブル」、ゴッホの「ひまわり」と「自画像」、ゴーギャンの「タヒチの女達」である。審美眼のある人ならば、それぞれの絵の特色と価値がよくわかるのかもしれない。しかし、凡人の私は、すべて立派に見えて、甲乙などつけ難いとの印象を持った。ただ、フランスの「古き良き時代」の美術の流れは、少しは、理解できたと思われる。

平成24年6月26日

自由俳句：

名絵画半日過ごす美術館

7) シャンゼリゼ通りの建築群

コンコルド広場から凱旋門にかけてのシャンゼリゼ大通りを歩いてみた。マロニエとプラタナスの街路樹が整然と並び、西側には、カフェ、レストラン、映画館、アーケードなどが並ぶパリ西北部の繁華街であり、世界でもっとも美しい通りと称されるのも、あながち誇張ではないと思われた。余談になるが、トイレの借用に立ち寄ったビルは、電気自動車の陳列を業務としていた。時代の流れを先取りしたものである。

凱旋門には上らなかつたが、ロワール広場で、凱旋門を背景に、写真を撮った。

平成24年6月26日

自由俳句：

シャンゼリゼ夏の緑の木立かな

8) セーヌ河畔の建築・彫刻群

バトームッシュという船会社のアルマ橋発着の「セーヌ川ディナー・クルーズ」を満喫した。夜のイルミネーションに彩られて、いくつかの橋を越えながら、1時間ぐらい、豪華客船のディナーを味わった。途中、セーヌ河畔の建築群と自由の女神像、エッフェル塔を眺望できた。

平成24年6月26日

自由俳句：

セーヌ川光に浮かぶ建築群

令和7年1月9日

追記：

パリは、「花の都」ともいわれ、トランジットを含めて、7回ぐらい滞在し、その街並みを眺め、いろいろな建造物や景色の美景を楽しんだことを懐かしく思い出される。ただ、最近、日本で、いろいろな建築・建造物等の老化・劣化と不具合に絡む不測の事故などが起こっていることを考えると、千年・万年も、花の都というわけにはいかないだろうと思われる。都市計画も含めて、その修復・再構築・新生の道筋を考えてほしいと願うところである。

花と鳥と蝶

花や鳥および蝶は、それら単独でも美しく趣深いものも多い。しかし、これらを2つ以上組み合わせた構図や情景は、また別の感慨深い趣向と芸術を生むようである。古くは、「梅に鶯ホーホケキョウ」というように、春一番の花の梅には、鶯が組み合わせとして知られていたが、最近は、目白との組み合わせが多いようであり、実際、梅の花近くでの目白の姿も多い。また、余談になるが、最近、鶯の鳴き声は、4月から5月の晩春から初夏にかけて、

雑木林で聞くように変わったようでもあり、「梅と鶯」の取り合わせは、とんと見かけなくなった。しかし、古来、花と鳥の組み合わせは、江戸時代の奇想の絵師の伊藤若仲の『動植綵絵』（どうしょくさいえ）にもよく見られる。桜との組み合わせも、「桜と鷹」という葛飾北斎「長大判花鳥図」の連作の浮世絵にみられる取り合わせが、有名である（最近、福岡市の美術品市場で、火鉢の側板の版木画として描かれていたのが、発見されたという報道があったようである：読売新聞2021年1月26日朝刊）。また、昔から、花と蝶の組み合わせも論じられることも多い。花札では、「牡丹と蝶」を組み合わせたものがある。他方、春の野の花である菜の花の間を飛び回るモンシロチョウやモンキチョウの組み合わせも結構多い。他方、最近は、ツバメや白鳥などの鳥だけでなく、蝶も、花を求めて、渡りをする種類もあることが知られるようになってきた。「アサギマダラ」は、ヒヨドリバナやフジバカマの花にとまる姿がみられるが、沖縄と日本の1,300kmの間を渡る蝶のようである。また、「オオカバマダラ」は、大集団で、カナダ南部からメキシコ北部間を5,000km以上におよぶ大移動をするようである。主に、幼虫の食草を確保するためとも言われているが、美しい蝶も、生存と子孫繁栄のための工夫と遺伝子プログラムの故かもしれないという。

令和3年2月8日

自由俳句：

大移動花を求める蝶々かな

令和7年1月9日追記

渡り蝶大空遙か長い旅希望のために身に着けた知恵

花と鳥と蝶

花や鳥および蝶は、それら単独でも美しく趣深いものも多い。しかし、これらを2つ以上組み合わせた構図や情景は、また別の感慨深い趣向と芸術を生むようである。古くは、「梅に鶯ホ一ホケキヨウ」というように、春一番の花の梅には、鶯が組み合わせとして知られていたが、最近は、目白との組み合わせが多いようであり、実際、梅の花近くでの目白の姿も多い。また、余談になるが、最近、鶯の鳴き声は、4月から5月の晩春から初夏にかけて、雑木林で聞くように変わったようでもあり、「梅と鶯」の取り合わせは、とんと見かけなくなつた。しかし、古来、花と鳥の組み合わせは、江戸時代の奇想の絵師の伊藤若仲の『動植綵絵』(どうしょくさいえ)にもよく見られる。桜との組み合わせも、「桜と鷹」という葛飾北斎「長大判花鳥図」の連作の浮世絵にみられる取り合わせが、有名である(最近、福岡市の美術品市場で、火鉢の側板の版木画として描かれていたのが、発見されたという報道があったようである: 読売新聞2021年1月26日朝刊)。また、昔から、花と蝶の組み合わせも論じられることが多い。花札では、「牡丹と蝶」を組み合わせたものがある。他方、春の野の花である菜の花の間を飛び回るモンシロチョウやモンキチョウの組み合わせも結構多い。他方、最近は、ツバメや白鳥などの鳥だけでなく、蝶も、花を求めて、渡りをする種類もあることが知られるようになってきた。「アサギマダラ」は、ヒヨドリバナやフジバカマの花にとまる姿がみられるが、沖縄と日本の1,300kmの間を渡る蝶のようである。また、「オオカバマダラ」は、大集團で、カナダ南部からメキシコ北部間を5,000km以上におよぶ大移動をするようである。主に、幼虫の食草を確保するためとも言われているが、美しい蝶も、生存と子孫繁栄のための工夫と遺伝子プログラムの故かもしれないという。

令和3年2月8日

自由俳句:

大移動花を求める蝶々かな

